

## ダウン症児の生活行動の改善をめざした支援

—「セルフエスティーム」を高めることを通して—

瀬尾 佳与子\*

本稿は、ダウン症児の“かたくなな態度”を彼らのセルフエスティームが低められた結果生じるものであると考え、その態度や生活行動の改善をめざした事例を報告する。

実践報告では、養護学校に在籍している知的水準は高いものの身体を清潔にすることを面倒がってしまう生徒に、発音指導や日常生活の指導において、「できた」という自信や達成感を持たせることでセルフエスティームを高めるようにした。このことにより対象児は今まで「やったつもり」であったことを注意されることで、存在そのものまでも十分に認めてもらえていなかったと感じていたと思われるが、それらが支援により積極的な生活態度に改善された。このように障害児教育においても「セルフエスティームの向上」という視点を持つことが大切であることが再確認された。

キーワード：被包感、ダウン症、セルフエスティーム、家族との連携

### はじめに

子ども自身の生活の学習活動の基本前提として松坂<sup>1)</sup>は、子ども自身の外界の受容・かかわりの重要性を指摘しており、教育活動において前提となるものとして受容的・共感的人間関係の存在をあげている。松坂はその著書においてドイツの教育哲学者であるボルノー (Bollnow, O, F) の「被包感」という言葉を引用して、さらに重要性を説明している。

ボルノーは人間の生存と成長の必須の基盤として被包感の獲得を強調している。被包感とはまわりの人(世界)に温かく包まれ、見守られているというやすらぎ感・安心感というべきものである。これは基本的には、母親の愛情と保護と母親への絶対的信頼に基づく普遍的な安らぎであるとされる。このようにボルノーは「被包感が欠如している場合には、世界はその子ども(人)に脅威的に迫ってくる恐ろしい力であり、もしどこかで誰かがそのような被包感を与えないならば、その子ども(人)は人生への意志を失い、希望もなく萎縮するに違いない」と

述べている。

また近年心理学用語として、自分を大切にすること、自分を好きであること、自分に自信もっていることとして、セルフエスティーム (self esteem) (自尊感情) という言葉が注目されている<sup>2)</sup>。

アメリカの教育心理学者たちは、教育にとって不可欠なものであり、学んだ知識や認識を自分のものとして吸収するためには、セルフエスティームを持った主体が必要であると指摘している。

これはマズローの「ニーズの階層」理論における欠乏動機づけの上層部に位置する成長動機づけであると考えられる。すなわちセルフエスティームは、自分を価値ある存在だと思ふ心であり、かけがいのない自分を大切にしたいと思ふ心、そしてそのことを認めてくれる他者の存在へのニーズである。

このようにセルフエスティームは、ボルノーの指摘する「被包感」と同様、安心感といえるのではないかと考えられ、教育活動において不可欠なものであると思われる。このことに基づき、障害児教育においてセルフエスティームを高めるための支援について考えることにする。

\* 三重大学教育学部附属養護学校

## 実践報告

### 1 ダウン症児の“かたくなな態度”

ダウン症児の日常生活をおくる上での適応について、細川<sup>3)</sup>は「自立機能」や「身体的機能」「仕事」などの分野において、特に得意であると指摘している。一方、不適応行動においては比較的少ないとしながらも、彼らに多く出現が見られる不適応行動として、「注意を素直に聞けない、欲求不満をうまく処理できない、指示や要請、命令に従うことを拒む<sup>4)</sup>」などをあげられている。

これらはしばしば人とのかかわりの中で、“かたくなな態度”として現れることになると思われる。

その原因として、菅野ら<sup>5)</sup>はストレスに対する耐性が弱いこと、言語表現が十分でないこと、ストレス解消がうまくないこと等を指摘している。

そこで本実践では、“かたくなな態度”を彼らの自尊感情（セルフエスティーム）が低められた結果生じるものであると考え、そのセルフエスティームを高める支援をすることで、“かたくなな態度”が改善されていくのではないかと仮説する。

具体的には、養護学校に在籍している知的水準は高いものの、身体を清潔にすることを面倒がってしまう生徒の支援において、自分を価値ある存在と認められることで、生活行動が改善されたと思われる事例について報告する。

### 2 実際の支援について

#### (1) 対象児

A子

(養護学校中学部2年 やや肥満傾向)

- ①WISC-IIIの結果は、言語性IQ 52 動作性IQ 46 全IQ 43で、下位検査からは、視覚的短期記憶が苦手と思われる。
- ②日常会話には問題はないが、発音がやや不明瞭なため、聞き取りにくいところがある (Table 1 参照)。

③家族構成は、最近になって病弱の祖父が同居し、父、母、妹の5人家族で、主に母がA子にかかわっている。両親ともA子に関する実態を十分に把握できているといえず、本人への要求水準も高いと思われる。

④場面や状況の理解に優れており、よく気がつくことから、集団ではリーダー的な存在であるが、時に自分中心の考えから、かたくなな態度をとることが見られる。

⑤身辺自立に関しては、清潔への意識が薄いために、特に排泄において十分にはできていないところがあり、下痢を起こした後の始末がうまくできなかったり月経時に下着を汚したりすることが見られる。

#### (2) 支援の方向性

①学校生活の中で、本人が「できた」という実感が持てるような支援を行うことで、自信を持たせ、“かたくなな態度”をとってしまうような場面を減らしていく。具体的には、国語（自立活動も含む）や美術での支援において成功経験を増やしていく。

②清潔に関しては、本人は「やったつもり」「できたつもり」であるために、その不十分さが母親のネガティブな評価になっているため、排泄の場面などには付き添うようにし、基本から丁寧に支援していく。

③家庭に対しては、学校での様子や実態を連絡帳等で知らせたり、懇談で話をしていく。また担任教師と協力して本人のよさを事実として伝え、ほめて育てていく大切さを訴えていく。

性教育における排泄・月経の支援では、授業を参観してもらい、実態を伝えて家庭との連携の必要性についてふれていく。

#### (3) A子に対する支援

①国語（自立活動も兼ねた）における発音指導  
A子は、発音がやや不明瞭であるために、自分の意思を伝え切れていないこともあるのではないかとされた。そこで、千種養護学校で開発された「指示法」を用いて指導する。

Table 1 6月の構音検査表

	構音点	検査音	I		M		F	
			S	R	S	R	S	R
1	母音	i	イ ヌ		タ イ コ		ト ケ イ	
2		e	エ ントツ		カ エ ル		ツ ク エ	
3		a	ア サ ガ オ	ア タ ガ オ	ピ ア ノ		ド ア	
4		o	オ ニ		ライ オン		ラ ジ オ	ラ チ オ
5		w	ワ ニ		チャ ワ ン		デ ン ワ	
6	両唇音	P	ポ ス ト		エンピツ		コ ッ プ	
7		b	ブ ラ ン コ	プ ラ ン コ	ソ ロ バ ン	ゾ ロ バ ン	テ レ ビ	
8		m	メ ガ ネ		シ マ ウ マ	チ マ ウ マ	ク マ	
9	F	フ ネ	ラ ネ	オ フ ロ	オ ウ ロ	サ イ フ	タ イ フ	
10	歯音	S	センタクキ	テンタツキ	ウ サ ギ	ウ タ ギ	ナ ス	ダ ス
11		ts	ツ ミ キ		カタツムリ		ナ ガ グ ツ	
12		dz	ゾ ウ	ド ウ	ネ ズ ミ		ス ズ	ズ ズ
13	歯茎音	t	タ コ		オタジャクシ	オタチャマ	ロ ボ ッ ト	
14		d	デ ン シ ャ	テ ン シ ャ	ユキダルマ		フ ネ	ラ デ
15		n	ネ コ		ハ ナ ビ	ア ナ ビ	ハ ネ	ア ネ
16		r	ニ ユ ー ス		コンニャク		ギ ユ ー ニ ユ ー	
17		ʃ	シ カ	チ カ	ミ シ ン	ミ チ ン	ツ ク シ	
18		tʃ	チ リ ト リ		チョーチョ		マ ッ チ	
19		dʒ	ジ テ ン シ ャ	チ テ ン ジ ャ	ニンジン		カ ジ	
20	r	リ ン ゴ		カザグルマ	カダグルマ	ク リ		
21	硬口蓋音	f	ヒ コ ー キ		ア ヒ ル	ハ ヒ ル	ア サ ヒ	
22		j	ヤ ギ		ク レ ヨ ン		サ カ ナ ヤ	タ カ ナ ヤ
23	軟口蓋音	k	カ メ		テ ブ ク ロ	テ ド ッ ク ロ	ス イ ス	ズ イ ス
24		g	ゴ ハ ン	ゴ ア ン				
25		ŋ			カンガルー			
26		r			チューリップ		ノ コ ギ リ	
27	声門音	h	ハ サ ミ	ア タ ミ	ヒノマルノハタ	イノマルノハタ	キ ノ ハ	

「指示法」とは、聴覚障害幼児のコミュニケーション手段として導入されたキュードスピーチを、「千種聾学校統一指示法」としてまとめたものである。これは口形だけでは弁別しにくい発音の際の舌や息の状態を手や指の動きで示し、発音要領を直観的に把握させるものである。

A子は聴覚的には問題はなかったが、手の動きという視覚的な手がかりが、発音のきっかけとなる方法として有効ではないかと考え、導入することとする。

また音読にも苦手意識が見られたため、教師に対して「なぞなぞを出す」という方法で音読の機会を作り、その都度「指示法」を用いて正しい発音を指導していく。

### ②美術の時間における描画指導

普段よりA子はよくノート等に絵を描いており、美術の授業で描画を取り上げることで、より自信につながるのではないかと考えた。そこで「静物画を描く」という題材において、身近にあるものをビデオで撮影し、それをテレビ画面に映すことで、対象を明確にし、じっくり描写するよう指導していく。

### ③日常生活の指導

ア) 排泄については、トイレに同行し大便の始末やペーパーの使用について、一つひとつ確認しながら手を取って指導していく。失敗させないことを目標とする。

イ) 歯磨きについては、砂時計を用意し教師と歯磨き粉を共有して使うことで、いっしょに磨く機会を持つ。長く丁寧に磨けたときは、きちんと認めていく。

ウ) 月経については、性教育の中でプライベートゾーンを守ることや清潔にすること、月経のしくみを指導していく。その中で、具体的に実際の場面と結びつくよう模擬トイレを作り体験することで、使用法を指導していく。以下、授業内容について記す。

### 生活単元学習「きれいにしよう」

#### 1 生活単元学習の目標

- 身体の仕組みを知ることができる。
- 身体を清潔にしようとする態度を養うことができる。

#### 2 ○月/○日

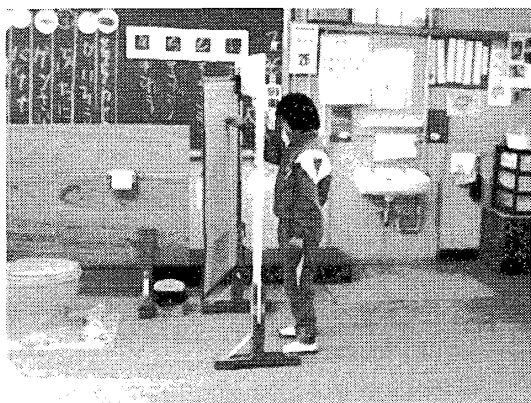
「トイレの使い方を学ぼう」

#### <目標>

- トイレの正しい使用のしかたを学ぶことができる。

#### <写真>

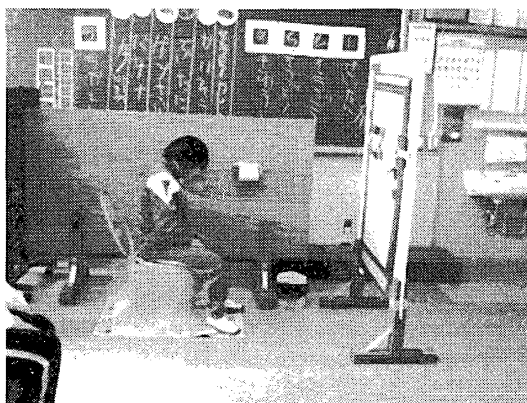
##### (1) ノックをする



##### (2) かぎをしめる



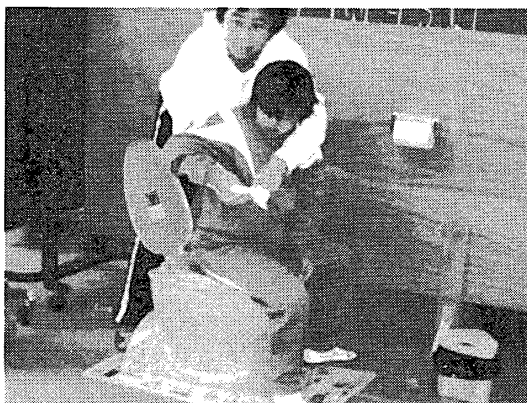
##### (3) 排便をする



##### (4) ペーパーでふく



##### (5) ペーパーを確認する



##### (6) 水を流す



＜指導方法＞

教室に実際のトイレと同じような模型（写真参照）をつくり、一人ひとりがトイレを利用しているような体験をしていく。

その際、その場面ごとに気をつけることや大切なことを指導していくようにする。

(4) 家族に対する支援

家庭に対しては、個別の指導計画における保護者とのやりとりの中で、「身体を清潔に保つことができる。」という内容を共通の目標として、学校での実態をサイクルシート<sup>9)</sup>という形で報告し、保護者からの意見を書いてもらうようにする。

その中では、本人の実態について、どうしてうまくできないのかを知らせていき、十分に身体のことや清潔に対する意識が育っていないことを伝えるようにする。

A子と関わるものが、A子の行動についてネガティブな印象を持つことが、A子のセルフエスティームをより低めることになり、それが“かたくなな態度”となるという悪循環が断ち切れるものとなるように心がけていく。

目標としては「身体を清潔すること」であるが、A子と信頼関係をつくることをまず第一と考えて、接していくようにし、その接し方を伝えていくようにする。

これらの取り組みを通じて、家庭においても、A子が母親にどんなときでも気軽に話せるような関係となることを期待したい。

また家庭が安心できる場となれば、A子をめぐる家庭内のシステムにも変化が起こるのではないと思われる。

3 実践を終えて

(1) 対象児に見られた変化

a) 発音について

発音については、Table 2 1月時の構音検査表から以下のことがいえる。

①アサガオ、サイフ等、S音がt化してい

たものが改善された。

②シカ等のtʃとなっていたものがʃと正しく構音され、省略されていたh音も構音された。

③ブランコ、テブクロ等のbw音、デンシャのdも正しく構音された。

結果からは、sが省略されたり、混乱があったり構音しにくい音があり、まだまだ改善されていない部分はあるものの、6月時には摩擦音が破裂音に置換し、有声音と無声音の混乱がみられたが、1月の結果ではずいぶん改善されたことがわかる。

これはA子が聴覚的には問題がなかったことで、間違った発音を指摘されたときも、聴覚的フィードバックにより誤りを自覚し、自ら「指示法」による手の動きを行い、発音し直すことができたことが大きいと思われる。

このように発音が改善されたことで、学校での様々な場面で、相手が聞き取りにくい表情をしたときには、自分から手を動かして言い直す姿を見ることができた。

家庭においても、自分から絵本を声を出して読む姿が見られるようになったと報告されている。

b) 日常生活について

日常生活の支援においては、排泄や歯磨きなどの場面ではめられる機会も増え、自分からできたことを報告するような自信も感じられるようになった。

また月経についても、時期を予想することで下着を汚すこともなくなり、自分からトイレに行く姿が見られるようになった。排泄においても、十分かどうかを教師に確認する場面も見られるようになった。

不適応行動として、何度となく見せていた“かたくなな態度”はほとんどなくなり、教師に対しては、甘えるような姿を見せるようになった。

A子は家庭での様子を学校でよく話すようになり、母親に対しても「すき」と言ったり、「ほめてもらった」と喜ぶ姿を見せるようになった。

Table 2 1月時の構音検査表

	構音点	検査音	I		M		F											
			S	R	S	R	S	R										
1	母音	i	イ	ヌ	タ	イ	コ	ト	ケ	イ								
2		e	エ	ント	ツ	カ	エル	ツ	ク	エ								
3		a	ア	サ	ガ	オ	ピ	ア	ノ	ド	ア							
4		o	オ		ニ	ライ	オン	ラ	ジ	オ								
5		w	ワ		ニ	チャ	ウン	デ	ン	ワ								
6	両唇音	P	ポ	スト		エン	ピ	ツ	コ	ッ	プ							
7		b	ブ	ラン	コ	ソ	ロ	バン	テ	レ	ビ							
8		m	メ	ガ	ネ		シ	マ	ウ	マ								
9		F	フ		ネ		オ	フ	ロ	サ	イ	フ						
10	歯音	S	セン	タク	キ		ウ	サ	ギ		ナ	ス						
11		ts	ツ	ミ	キ		カタ	ツ	ム	リ		ナ	ガ	グ	ツ			
12		dz	ゾ		ウ	ド	ウ	ネ	ズ	ミ		ス	ズ	ス	ス			
13	歯茎音	t	タ		コ		オ	タ	マ	ジャ	ク	シ		ロ	ボ	ット		
14		d	デ	ン	シャ		ユ	キ	ダル	マ		フ		ネ				
15		n	ネ		コ		ハ	ナ	ビ			ハ		ネ				
16		r	ニ	ュ	ース		コ	ン	ニ	ャ	ク		ギ	ュ	ー	ニ	ュ	
17		ʃ	シ		カ		ミ	シ	ン			ツ	ク	シ				
18		tʃ	チ	リ	トリ		チ	ョ	ー	チ	ョ		マ	ッ	チ			
19		dʒ	ジ	テ	ン	シャ	チ	テ	ン	シャ		ニ	ン	チ	ン		カ	ジ
20		r	リ		ン	ゴ		カ	ザ	グル	マ		ク		リ			
21	硬口蓋音	f	ヒ	コー	キ		ア	ヒ	ル			ア	サ	ヒ		ア	サ	イ
22		j	ヤ		ギ		ク	レ	ヨ	ン		サ	カ	ナ	ヤ			
23	軟口蓋音	k	カ		メ		テ	ブ	ク	ロ		ス	イ	ス				
24		g	ゴ		ハ	ン												
25		ŋ						カ	ン	ガ	ルー							
26		r						チ	ュ	ー	リップ		ノ	コ	ギ	リ		
27	声門音	h	ハ		サ	ミ		ヒ	ノ	マル	ノ	ハ		キ		ノ	ハ	

(2) 連絡帳に見られた家庭内での変化

学年当初から、家庭においても“かたくなな態度”をとることがよく報告されていた。

また身辺自立においても、十分にできていない状況に悩んでいる様子が記述されていた。

しかし、このような支援の取り組みを実施した後には、サイクルシートのやりとりの中で「ほめたくても、ほめる材料がない」という記述や、母親自分が自分のかかわり方を反省するような変化が見られるようになった。

『生活単元学習』の授業を参観してもらった後では、お風呂にいっしょに入ったり、本人専用のシャンプーを買い与えたことが報告された。家庭においても、授業で用いた「ふけつ」という言葉を使って、子どもの実態に寄り添うような姿勢が感じられた。

その後も、手伝い（布団たたみなど）を積極的にいたり、自分から身体を動かしたりしたというようなA子のポジティブな面が書かれるようになった。

なにより母親中心であったしつけに関しても、父親の参加がみられ、A子に対してしかる場面も報告された。

このように、家庭内でのA子の存在が変化しただけでなく、A子をめぐる家族システムの変化が感じられた。

おわりに

A子は状況の理解に優れていることから、様々な場面で期待されることが多い。しかしながら、実態としてはそれらに十分答えられないことも、

“かたくなな態度”として現れていたのではないかと考えられる。

また対人関係のレベルから考えても、ほめてほしい、甘えたいという思いが強く、注意されたりしかられたりすることは、「嫌い」（自分を認めてもらっていない）な人という意識であったと思われる。

これらのことから今までA子は、「やったつもり」であったことを注意されることで、セルフエスティームが低められ、存在そのものまでも十分に認めてもらえていなかったと感じていたのではないかとと思われる。

今回セルフエスティームを高める支援をすることで、積極的な生活態度に改善されたと考える。

このように障害児教育においてもボルノーのいう「被包感」ともいうべき、個々の子どもたちの「セルフエスティームの向上」という視点を持つことが大切であることが再確認された。

#### <引用文献>

- 1) 松坂清俊 保育（教育）の前提 松坂清俊 著 障害幼児の発達援助 コレール社 pp 257-258 1998年
- 2) 森田ゆり 人権意識ってなに？ 森田ゆり 著 エンパワメントと人権 解放出版社 pp 31-36 1998年
- 3) 細川かおり・池田由紀江・橋本創一・管野 敦 学齢期および青年期ダウン症児・者の適応行動の特徴 心身障害学研究 第16巻 pp111-116 1992年
- 4) 細川かおり・池田由紀江・橋本創一・管野

敦 青年期・成人期ダウン症者の適応行動の特徴 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集 pp192-193 1994年

- 5) 管野 敦 生活への適応 管野 敦・池田由紀江編 ダウン症者の豊かな生活 pp 43-48 1998年
- 6) 三重大学教育学部附属養護学校 サイクルシートシステムについて 三重大学教育学部附属養護学校研究紀要 第19集 pp4

#### <参考文献>

- 1) 愛知県立千種聾学校 発語発音指導のための指示法 愛知県立千種聾学校編 愛知県立千種聾学校発行 1980年
- 2) 引野明子 面談で大事にしたい視点 家族療法（システムズアプローチ）の立場から 月刊「実践障害児教育」
- 3) 小野寺基史 保護者の気持ちに寄り添って－教育相談の場で－ 発達の遅れと教育
- 4) 奇恵英「障害児（者）をもつ親の心理特性について－育児におけるアンビバレントな感情の変容過程－」日本特殊教育学会第34回大会発表論文集 1996年

#### 謝 辞

発音検査表の分析に関して、協力していただいた津市立養正小学校の小島玉子先生に感謝の意を表します。

これは日本特殊教育学会第41回大会に発表したものを加筆・修正したものである。